

2014年4月22日

プレスリリース  
報道関係者各位

合同会社土曜社

## 革命期ロシアの未来派詩人が半世紀ぶりの新訳で甦る

合同会社土曜社（東京・渋谷）は、ロシア未来派の詩人マヤコフスキーの長篇詩および戯曲を「マヤコフスキー叢書」と題し、小笠原豊樹（82）氏の新訳で刊行する運びになりました。全15巻予定です。

第一巻は、青年マヤコフスキー22歳の長篇詩『ズボンをはいた雲』です。友人オシップ・ブリークの私家版として1915年に1050部が世に出た本作は、半世紀を待たずして、1952年に当時20歳の小笠原豊樹氏が日本語に翻訳し、わが国でも読まれるようになりました。

この翻訳に衝撃をうけた詩人の入沢康夫氏は、6年後の1958年に『ズボンをはいた熊』なる短篇を発表します。また、さらに6年を経た1964年には、大江健三郎氏が小説『日常生活の冒険』の主人公・斎木犀吉に次のように語らせます。「きみはマヤコフスキーを読んだことがあるかい？」と。

長く「自殺」とされてきた詩人マヤコフスキーの死をめぐる、スコリャーチン『きみの出番だ、同志モーゼル』（草思社、2000年）や小笠原豊樹氏の書き下ろし『マヤコフスキー事件』（河出書房新社、2013年）など、各国で検証が進みながらも、肝心ともいべき詩人の作品は、ほぼ半世紀にわたり、日本語訳が入手できない状態が続いてきました。

以上

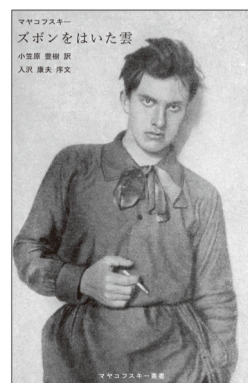
シリーズ：マヤコフスキー叢書（全15巻）

書名：ズボンをはいた雲

著者：マヤコフスキー ロシア未来派の詩人。1893年、グルジアのバグダジ村に生まれる。十月革命を熱狂的に支持するも、レーニンの死後、スターリン政権に失望を深め、30年4月14日、モスクワ市内の仕事部屋で謎の死を遂げる。翌日プラウダ紙が「これでいわゆる《一卷の終り》／愛のポートは粉々だ、くらしと正面衝突して」との「遺書」を掲載した。

訳者：小笠原豊樹〈おがさわら・とよき〉 ロシア文学研究家、翻訳家。1932年、北海道虻田郡東倶知安村ワッカタサップ番外地（現・京極町）に生まれる。51年、東京外国語大学ロシア語学科在学中にマヤコフスキーの作品と出会い、翌52年『マヤコフスキー詩集』を上梓。露・英・仏の3か国語を操り翻訳多数。2013年出版の『マヤコフスキー事件』で読売文学賞受賞。

新書変型・96頁 2014年5月10日発売予定（以後月刊） ISBN978-4-907511-01-2 予価952円＋税



続刊：①ズボンをはいた雲（入沢康夫・序文）／②悲劇ヴラジーミル・マヤコフスキー／③背骨のフルート／④戦争と世界／⑤人間／⑥ミステリヤ・ブッフ／⑦一五〇〇〇〇〇〇／⑧ぼくは愛する／⑨第五インターナショナル／⑩これについて／⑪ヴラジーミル・イリイチ・レーニン／⑫とてもいい！／⑬南京虫／⑭風呂／⑮声を限りに ※各巻にマヤコフスキーをめぐる長めの序文を掲載予定

執筆者への取材、見本・画像データのご用命は、下記担当者が承ります。  
合同会社土曜社 | 150-0033 東京都渋谷区猿楽町 11-20-305 | www.doyosha.com  
担当・豊田剛 | tsuyoshi.toyota@doyosha.com | t. 050-3633-1367 | f. 03-6369-3339